VAN Gogh AND STILL LIFE
FROM TRADITION TO INNOVATION

ゴッホと静物画 伝統から革新へ

フィンセント・ファン・ゴッホは、37年の生涯に約850点の油彩を描き、
そのうち静物を扱ったものは190点近くにのぼります。
本展覧会では、ヨーロッパの静物画の流れのなかにゴッホを位置づけ、
ゴッホが先人たちから何を学び、それをいかに自らの作品に反映させ、
さらに次世代の画家たちにどのような影響をあたえたかを探ります。
ヨーロッパ絵画史からみるゴッホの作品世界を通じて、
伝統から革新へ連なる静物画の豊かな広がりをお楽しみください。

開催概要

会　　期｜2023年10月17日(火)－2024年1月21日(日)
休 館 日｜月曜日(ただし1/8は開館)、年末年始(12/28－1/3)
開館時間｜10:00－18:00(ただし11/17(金)と12/8(金)は20:00まで)
※最終入館は閉館30分前まで

主　　催｜SOMPO美術館、NHK、NHKプロモーション、日本経済新聞社
協　　賛｜SOMPOホールディングス
特別協力｜損保ジャパン
協　　力｜KLMオランダ航空、日本航空
後　　援｜オランダ王国大使館、J-WAVE、新宿区

展覧会公式サイト｜ https://gogh2023.exhn.jp/

[凡例]
・作品図版のデータは、作品番号、作家名、作品名、制作年、所蔵先の順に記載されている(表紙を除く)。
・作品番号は、展覧会図録および展覧会場のキャプションに付された番号と一致する。
・「フィンセント・ファン・ゴッホ略年譜」の各年に記載された作品名は、おおよそファン・ゴッホの制作順に並んでいる。

SOMPO美術館
Sompo Museum of Art
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
新宿駅西口より徒歩5分
https://www.sompo-museum.org/
050-5541-8600(ハローダイヤル)

VAN Gogh AND STILL LIFE
FROM TRADITION TO INNOVATION

フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》1888年 SOMPO美術館

ゴッホと静物画 伝統から革新へ

鑑賞ガイド

静物画の歴史

HISTORY OF WESTERN ART AND STILL LIFE PAINTING

静物画の歴史

静物画とは

花、日用品（食器や書物など）、楽器、死んだ狩りの獲物や魚、食べ物（果物、パン、チーズ、お菓子等）など、生命を持たず動かない物を描いた西洋絵画の分野を静物画といいます。古代ギリシア・ローマ時代から、事物をリアルに表現した絵画は存在していましたが、西洋美術史上、静物画がひとつの分野として確立するのは17世紀といわれています。

プロテスタント（教会の装飾はカトリックに比べて簡素）が台頭した**17世紀のネーデルランド**（現在のオランダ）では、それまで教会に飾られていた大型の宗教画に代わり、**現世の事物をリアルに描いた**小型の静物画が流行しました。

6. ピーテル・ファン・ノールト《静物（魚）》
1670年頃 クレラー=ミュラー美術館、オッテルロー
© 2023 Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, The Netherlands

17世紀 静物画の確立

静物画の展開 18世紀

26. コルネリス・ファン・スペンドンク《花と果物のある静物》
1804年 東京富士美術館

アカデミスムでは神々や人間の営みを描いた歴史画が最も高尚な分野とみなされ、静物画は下位に位置づけられていました。しかし静物画の愛好者は多く、特に大航海時代に端を発する**植物学への関心や園芸品種の開発は、花の静物画の発展**につながりました。

19世紀中頃、フランスでは**17世紀オランダの静物画を再評価**する動きが高まりました。また新たに台頭したブルジョワジーの多くは、手ごろで理解しやすい静物画を好んで買い求めました。画家にとっても静物画は、対象を緻密に描くという点で、**その力量が試される分野**でした。

17. アンリ・ファンタン=ラトゥール
《プリムラ、洋ナシ、ザクロのある静物》
1866年 クレラー=ミュラー美術館、オッテルロー
© 2023 Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, The Netherlands

19世紀 静物画の再生

近代絵画と静物画 20世紀

59. ポール・セザンヌ《りんごとナプキン》
1879～80年 SOMPO美術館

19世紀末から20世紀にかけて、画家たちは絵画を絵の具におおわれた単なる平面と考え、本物そっくりに描くよりも、**色や形を独立したものとしてとらえ始め**ました。たとえば人間の顔に緑を使い、四角形や三角形のみで風景を表すこともありました。**描くものや配置を画家の意志で決める**静物画は、こうした試みに都合の良い分野でした。

VINCENT VAN GOGH

フィンセント・ファン・ゴッホ 略年譜

[1853 – 1890]

1853		3月30日 フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ、オランダ南部のズンデルトに生まれる。
1869	16歳	パリに本店を置く美術商、グーピル商会のハーグ支店で働き始める。
1873~74	20~21歳	グーピル商会のロンドン支店に勤務。一時期、パリ支店に勤務。
1875	22歳	正式にパリ支店に勤務。このころから聖書に没頭するようになる。
1876	23歳	4月 グーピル商会を解雇される。 4月~12月 両親のいるオランダのエッテンを経て、イギリスのラムズゲート、アイズルワースで教師を勤める。
1877	24歳	牧師になるためアムステルダムの伯父のもとで学ぶが、1年で勉学を放棄する。
1878	25歳	8月~11月 ベルギーの伝道師養成学校で学ぶが、資格を得られず。
1879	26歳	ベルギー南部の炭鉱ボリナージュで臨時説教師として伝導活動に従事するが、常軌を逸した伝導を理由に、伝導委員会から活動を止められる。
1880~85	働く農民を描く	このころゴッホは鉛筆、チョーク、油彩で農民の働く姿を多く描きました。
1880	27歳	画家になることを決意。ブリュッセルの王立美術学校で学ぶ。
1881	28歳	ハーグで義理の従兄弟にあたる画家、アントン・マウフェの教えを受ける。
1882	29歳	ハーグでマウフェの指導のもと、素描を中心に制作する。
1883	30歳	9月 オランダ北部のドレンテ地方に向かう。 12月 ヌエネンにいた両親のもとに移る。
1884~85	31~32歳	ヌエネンで農民や農民の生活を主題にした作品を描く(翌85年まで)。 13.《野菜と果物のある静物》、11.《陶器の鉢と洋ナシのある静物》、12.《りんごとカボチャのある静物》、14.《鳥の巣》、15.《鳥の巣のある静物》

4. フィンセント・ファン・ゴッホ《麦わら帽のある静物》
1881年 クレラー＝ミュラー美術館、オッテルロー
© 2023 Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, the Netherlands

5. フィンセント・ファン・ゴッホ《コウモリ》
1884年 ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

1885~88 パリ

PARIS

1885年11月、オランダを出たゴッホはベルギーのアントウェルペンで暮らした後、1886年2月末ころ、フランスのパリに向かいます。そのころ、パリでは自然の明るい光や色に注目した絵が描かれており、ゴッホの絵は一気に明るいものに変化しました。

32. フィンセント・ファン・ゴッホ《赤と白の花をいけた花瓶》
1886年 ボイマンス・ファン・ブーニンヘン美術館、ロッテルダム
Collection Museum Boijmans Van Beuningen, Rotterdam

1885 32歳

11月 ベルギーのアントウェルペンに移る。
日本の浮世絵に興味を持ち始める。

1886 33歳

1月 アントウェルペンの王立美術学校で学ぶ。
2月 パリに移る。弟テオが暮らすモンマルトルのアパルトマンに同居する。
31.《ばらとシャクヤク》、54.《ヴィーナスのトルソ》、8.《燻製ニシン》、30.《カーネーションをいけた花瓶》、33.《花瓶の花》、50.《靴》

1887 34歳

56.《三冊の小説》、53.《水差し、皿、柑橘類のある静物》、
22.《青い花瓶にいけた花》、37.《結実期のひまわり》

3. フィンセント・ファン・ゴッホ《髑髏》
1887年 ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

1888~90 アルル

ARLES

1888年2月、ゴッホは明るい光と色を求めて南フランスのアルルに向かいます。
アルルのまぶしい太陽と澄んだ空気のなかで、
ゴッホの絵はさらにあざやかさを増していきました。

1888 35歳

2月19日 南フランスのアルルに向けてパリを出発。20日、アルルに到着する。
8月 《ひまわり》の連作に着手する。
10月23日 ゴーギャン、アルルに到着する。
12月23日 ゴーギャンと口論の末、自ら左耳を傷つける。
12月24日 アルルの病院に入院する。
57.《レモンの籠と瓶》

43. フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》
1888年 SOMPO美術館

1889~90 サン=レミ

SAINT-REMY

1888年12月、制作で意見が対立し激怒したゴーギャンはパリへ帰ることをゴッホに告げます。自分の呼びかけに唯一応じてアルルへ来たゴーギャンがパリに帰る…… 動揺したゴッホはカミソリを手にゴーギャンを襲うものの未遂に終わります。自省したゴッホは自己嫌悪におちいり、自らの耳をカミソリで切りました。事件後ゴッホはまずアルルの、その後アルルに近いサン=レミという町の精神病院に入院しました。

62. フィンセント・ファン・ゴッホ
《皿とタマネギのある静物》
1889年 クレラー=ミュラー美術館、オッテルロー
© 2023 Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, the Netherlands

1889 36歳

1月7日 退院。制作を再開する。
2月 入院と退院を繰り返す。
5月8日 サン=レミ=ド=プロヴァンスの病院に移る。

1890 オーヴェール=シュル=オワーズ

AUVERS-SUR-OISE

1890年5月、ゴッホは弟テオの勧めで、パリに近いオーヴェール=シュル=オワーズで療養することにしました。オーヴェールはぶどう畑や菜園の広がる静かな村です。ゴッホの制作は続きました。

1890 37歳

5月16日 サン=レミからパリ経由で、オーヴェール=シュル=オワーズに向かう。
5月20日 オーヴェール着。
7月27日 オーヴェールの麦畑から、銃弾を受けた状態で下宿先に戻る
(自ら撃ったとされる)。
7月29日 テオに看取られ死去。
7月30日 葬儀が営まれ、オーヴェールの墓地に埋葬される。

44. フィンセント・ファン・ゴッホ《アイリス》
1890年 ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)